



Title	谷崎潤一郎 深層のレトリック
Author(s)	細江, 光
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49384
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【62】

氏 名	ほそえ ひかる 細 江 光
博士の専攻分野の名称	博 士（文 学）
学 位 記 番 号	第 2 2 5 4 9 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 20 年 10 月 16 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	谷崎潤一郎 深層のレトリック
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 出原 隆俊 (副査) 教 授 荒木 浩 准教授 加藤 洋介

論 文 内 容 の 要 旨

「第一編 作家論編」の「第一部 谷崎文学の心理的メカニズム——共時的横断的研究」では、谷崎の生涯を通じて変わらない心理的特徴、中でも常識的な考え方では理解しがたい母に対する愛憎と近親相姦的な欲望、そしてマゾヒズム・フェティシズム・躁鬱気質・

肛門性格などを、その深層心理にまで分け入り、一つの起源から派生し枝分かれして行く、言わば樹木状の系譜として整理・説明することを目指し、また、多数の作品をなるべく網羅的に取り上げようとしている。

「第二部 谷崎文学の心理的メカニズム——通時的縦断的研究」では、西洋崇拜・日本回帰など、谷崎の変化について、その原因と本質を、関西への移住など外的偶然に帰してしまうのではなく、谷崎の内的必然性において理解・説明しようと試みている。

「第三部 作家特殊研究」は、深層心理的ではない特殊なテーマで行なった既発表の作家研究を集めたもので、「第一章 谷崎潤一郎と詩歌」では音楽や声の重要性に着目し、「第二章 谷崎潤一郎と戦争」では、谷崎が『細雪』で反戦の姿勢を貫いたという神話を、『きのふけふ』の削除箇所などを根拠に批判した。「第三章 谷崎家・江沢家とブラジル」では、潤一郎の妹・伊勢、弟・得三、従兄・平次郎、父・倉五郎の実家・江沢家など、従来余り知られていなかった周辺人物についての調査結果を報告している。

「第二編 作品論編」の「第一部 谷崎作品の深層構造」では、『天鵝絨の夢』『痴人の愛』『日本に於けるクリップン事件』『吉野葛』『春琴抄』『瘋癲老人日記』について、作中であからさまに述べられていない行間や含意・イメージの無意識的なニュアンスなどから、それぞれの作品の芸術的本質を読み取ろうと試みている。

「第二部 作品特殊研究」では、『象』『刺青』『人魚の嘆き』『ハツサン・カンの妖術』『ドリス』『乱菊物語』について、谷崎が作品を書く上で使用した種本を、新たに明らかにし、それと対照することで、作品の本質に新たな照明を当てている。

第六章の「偽作『誘惑女神』をめぐる」は、一時、谷崎の未発表作品とされた作品が、実は倉田啓明による偽作であることを証明したものである。

附録 1「比較文学ノート」では外国文学等の影響について、附録 2「モデル問題ノート」ではモデル問題について、それぞれ多数の作品に関して、その研究結果を列記している。

全体の分量は、四百字詰めに換算して 2 4 0 0 枚近くに及ぶものである。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、筆者が尊敬するというフロイトの「無意識を扱う精神分析的な考え方」について「私なりに正しいと感じたもののみを採用し」、谷崎の全作品をほぼ網羅して検討するという壮大な構えて貫かれたものである。その徹底振りには驚かされるものがある。類例を見ないというべきであり、生半可な批判を寄せ付けないようなものがある。そこには谷崎についての「小百科」としての本書の意味も十分に認められる。ただし、それをより実用化するためには、「索引」の存在が期待される。

また、その方法を用いない部分においても、作品分析の成果を重ねることによって、谷崎の日本回帰に「数年間の葛藤」があったことを論証する手続きは重要な成果を収めている。また、谷崎の戦争観について、全集未収録の発言や全集収録に至るまでの初出からの改変箇

所を丹念に追跡し、『細雪』には反戦的意図も戦意昂揚の意図もなかったことを明らかにしていることも高く評価されてよい。

さらに、谷崎周辺の人物に関する新たな事実の発掘を行い、新資料を紹介するなど、精緻な伝記考証の作業結果がふんだんに盛り込まれてもいる。

一方で、＜作者の死＞などを持ち出さずとも、細江氏のとらえる作者と作品の関係が一元的であることに対して、根本的に突き詰めた作業がなされているとはいえない。論文についての質疑において、フロイトの援用なども含めどの作者に対してもこのような方法が有効であるかのような認識が示されたが、いささか問題が残ろう。対象に即した様々なアプローチの可能性について、必ずしも十分に意識的であるとは言えない。

「谷崎が行なった意識的・無意識的な表現上の工夫・テクニクを解き明かすこと」が「深層のレトリック」と題する所以であるが、谷崎作品の「素晴らしさの秘密」が無前提で当然視されていることにも疑問を禁じえない。『細雪』や『鍵』『瘋癲老人日記』について「芸術的傑作」・「相応しい傑作」とまとめながら、その裏付けとなる作品分析が十分になされているとはいえない点があり残念である。

また、文学の「科学」という観点を前面に押し出しているが、一方で、フロイトへの「尊敬」や、「正しいと感じる」という言い方など、実際には、主観性が根深く混在している面がある。「クライン派理論の応用」と副題がある章に置いても、その理論の導入が唐突なものであり、十分に必然性を説明しきれていないように思われる。

このように要望や疑問点も幾つか出されるのであるが、量的・質的になしえた達成は否定できないものである。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。